
悪魔達の玩具

桐龍朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔達の玩具

【Nコード】

N8728F

【作者名】

桐龍朱音

【あらすじ】

容姿、頭脳、運動能力、全てにおいて平凡な高校一年生の女の子、安藤結衣。彼女には容姿端麗、頭脳明晰、運動能力抜群という非凡な三人の幼馴染がいる。彼らは底なしの我儘と意味不明な行動で日々、結衣を振り回す「遊び」が大のお気に入り。そんな彼らから逃げだそうと思いつながらも、結局彼らの言いなりになってしまう結衣の日常を描いた物語。果たして、結衣は彼らの「玩具」という立場から逃げられるのか・・・。

結衣の決意

私、安藤結衣あんどうゆういはこの世に生を受けてから十六歳である今まで、「幼馴染」という名の三人の悪魔の「玩具」になっている。

彼らは日々、様々な我儘や理解不能な行動で私を振り回す。それが彼らの「遊び」なのだ。

そして振り回され、ヘトヘトになる私を見て、艶やかな笑みを浮かべながら楽しむのだ。
何と上げつないことか…。

もちろん、私だって黙って遊ばれていたわけではない。

彼らから逃げようと色々な方法を試みた。

しかし、彼らの恐ろしく賢い頭脳と驚異的な運動能力によってすぐに捕まる。

そして、逃げた罰と言わんばかりにまた遊ばれる。

何事にも熱しやすく冷めやすい彼らだが、何故だか私で遊ぶことに今のところ飽きる気配がない。

けど、私だって、彼らから逃げることを諦めたわけではない。

いつの日か、完璧に整った彼らの顔が驚きに崩れてしまつくらい、華麗で確実な方法で逃げ出してやるのだ。

彼ら…悪魔達の「玩具」という立場から。

悪魔達、お昼を食べる

麗らかなとある春の日の午後。

青く澄み渡った空の下の中庭に広げられた五段重ねの重箱に入ったお弁当。

そのお弁当を作ってきた私は、こんな春の日には似つかわしくないほどげんなりした顔で深い深い溜息を吐いていた。

溜息の原因は、私が作ってきたこの5段重ねの重箱弁当を食べている悪魔達のせいだ。

とゆうか、私が溜息を吐くとしたら99%彼らのせいだ。

「ねえ、結衣。どおしてたこさんウインナーじゃないの？」

鈴のような愛らしい声と共に、ケチャップで炒められたウインナーが目の前に突き出された。

青い箸でつままれたそのウインナーの向こう側に、可愛らしく小首をかしげながら薄桃色の唇をとがらせている悪魔その1が見えた。男の子なのに女の子のような可愛い顔立ちと私よりも頭一つ分小さい身長、さらに明るい茶色であるが故に日に照らされると金色つぼく光るふわふわの髪と大きな瞳を持つ悪魔その1は、ファンから「天使」と呼ばれるほど可愛い外見をしている。

そのせいで、おもに上級生の女子から絶大な人気を得ており、彼のファンクラブはほとんどが年上のお姉さまにより構成されている。そんな「可愛い系」の悪魔その1は、その外見からは結びつかないほど腹黒い。

まさに、「天使の顔をした悪魔」なのである。

そんなことなど露知らず、彼から少し離れた後ろの方で同じようにお弁当を広げてこっそりとこちらをうかがっている「千隼ファンクラブ」の女子達が「かわいい！」と騒ぎ始めた。
うるさいったらありやしない。

「千隼、あんたってたこさんウィンナー好きだったっけ？」

彼のファンクラブ達の騒ぎ声に紛れてこっそりと問う。

昔、悪魔達のためのお弁当にたこさんウィンナーを初めて入れてみた時。

悪魔その1こと千隼は、今と同じようにウィンナーを箸でつまむと、「こんな形にして、何の意味があんの？」と、鼻で笑った。

あの時の何とも微妙な屈辱感忘れられない。

彼の必要以上に愛らしい顔に浮かべられた嘲りの表情は、些細なことで屈辱感というものを他人に感じさせられるのだ。

とは言っても、千隼は通常その本性を隠したブリっこキャラでいるので、彼の本性を知っているのは悪魔その2、その3を含んだ私達幼馴染だけだ。

なのでこの屈辱感はそうそう他人と分かち合えない。

「ファンサービスってやつだよ。そうじゃなかったら、誰があんなバカらしい形のものを食べたがるかよ」

摘まんだウィンナーを弁当箱に戻しながら、そっくり返してきた千隼の顔にはまさに悪魔のようなふてぶてしさと嘲りを含んだ笑みが

浮かべられていた。

というか、一度摘まんだものを戻すなよ…。
それに戻されたウインナーが何だか可哀想に見えてきちゃったじゃないの…。

そんなことを思いながら千隼の顔に視線を戻すと、大きな瞳を涙で潤ませ、捨てられた子犬のような可愛らしくも悲しげな「天使」の顔が飛び込んできた。

私はその顔を小さな溜息とともに見つめ返す。

男女問わず多くの人々を虜にしてしまう彼の「天使」の顔も、彼の本性を知る私にとっては何の効力もない。
むしろ、本性とのあまりの違いに恐怖と呆れを感じてしまうのだった。

「たこさんウインナーじゃないならいらないもん」

そう言う千隼はふいつと横を向いた。

その瞬間、彼のファンによるラブコールの嵐が吹き荒れた。
自然の力によって起こる本物の嵐にさえも打ち勝ってしまうんじゃないかと思うほどの吹き荒れようだ。
私の意識も吹き飛ばされてしまっんじゃないだろうか…。

「うるさい……」

「千隼ファンクラブ」によるラブコールの嵐の中を、よく通る凜とした声が駆け抜けていく。

一瞬にして、さっきとは同じ場所とは思えないほどの静寂に包まれる。

「さっきからうるさいのよ。そんなに興奮して、あんたたちは発情期のサルかつーの」

そんな毒気たつぷりの言葉を私の左隣りで吐き出しているのが悪魔その2ことユリアである。

彼女のよく通る凜とした声は、他を制する威圧感と吐き出された言葉が持つ毒気をさらに毒々しくさせる効果があるので、この空間は完全に彼女の独壇場と化していた。

「だいたいね、そんなに騒いだら周りに迷惑がかかるとか思わないわけ？ 思わないとしたら、あんたたちの知能レベルは、ブンブンと汚らしく飛び回るハエと同じね」

ハッ、と鼻で笑って締めくくると、ユリアはスッキリとした顔でお茶を飲み始めた。

ユリアの毒々しい言葉の対象となっていた千隼ファン達は、ユリア

の声が持つ威圧感にしばらく茫然としていたが、ユリアが再びお弁当を食べ始めると我に返ったのか苦々しい表情を浮かべながら、リダー格の子が反論してきた。

「な、何様のつもりよあんた。美人だからって、調子乗ってんじゃないわよ！」

確かにユリアは美人だった。

それもそんな所そこの美人とは比にならないほどだ。

ロシア人の父と日本人の母の間に生まれたユリアはいわゆるハーフというものののだが、彼女の外見におよそ日本人らしい部分は見当たらない。

すらり通った鼻筋に、濃密な長いまつげに縁取られた大きな金色の瞳、ぷつくりと膨らんだ唇、透き通るほど白い肌に、ウェーブがかった金色混じりの栗色の髪の毛、そしてしなやかに伸びる手足に、細い体のわりに豊かな胸。

父親の方の血を色濃く受け継いだらしい彼女の、人形のようにどこをとっても完璧な美しさに勝る人を私は見たことがない。

彼女と張り合えるのは、かの有名なアニメのフジコちゃんくらいだと私は思う。

「常識的な問題に容姿で何癖付けると、あんたたちの知能はハエ以下だわ」

冷たい嘲りの微笑みを浮かべながら、千隼のファンをまっすぐ見つめる彼女は、まさに悪魔的だった。

「だいたいさ、容姿で何癖付けるならあたしより美人になってからにしてくれる？不細工に言われると説得力無いのよね。ま、あたしより美しくなるなんて有り得ない話だけど」

あはは、と高らかに笑うユリアは悪魔的ではなく悪魔そのものだった。

邪悪なオーラさえ見える。

「美人は性格に難あり」とはよく言ったもので、ユリアはその典型的タイプだった。

彼女ほどの美人を見たことがないのと同様に、彼女ほど底意地の悪い女も見たことがない。

自分の美しさを十分理解しているのだから尚更たちが悪い。

あまりの自信満々に、千隼ファンも黙り込むしかないようだった。しかし、彼女たちの目にはまだ憎々しげな光が宿ったままだった。そんな彼女たちの瞳から発せられる視線に、ユリアは思わず見惚れてしまいそうなほどの艶やかな笑みで対応する。
すごすぎる…。

「ユリア様、さすがッス！痺れる〜！！！」

地響きのような声援が、ユリアの後ろの方から聞こえてくる。

この学校の男子がほとんど入会しているという「ユリアファンクラ

ブ」によるものだ。

このファンクラブでは、ユリアは「女王様」として祭りたてられている。

美しくも底意地の悪いユリアにはピッタリな祭りたてられ方だと思う。

「うるさいって言ってんでしょが！このバカどもが！！！」

ユリアは自分のファンクラブ員には特別に厳しい。

そうなる気持ちも少しわかる。

なにせ、女王様のようなユリアを同性別の女子たちが快く思うはずもなく、当然ながらユリアのファンクラブは男だけで構成されており、それはそれは暑苦しくむさ苦しいファンクラブなのである。

正直、「千隼ファンクラブ」の方がうるさいけれどマシな気がする。

「ユリア様に怒られた…！幸せすぎる！！！」

しかも「ユリアファンクラブ」は基本、マゾなのである。

大勢の男たちがユリアの叱責に恍惚とした表情を浮かべるのはなんとも気持ちが悪いものだった。

それにしても、これではうちの学校の男子のほとんどがマゾだということになる。

…複雑だ。

「ユリア、それくらいにしておきなよ。君はいつも刺々しすぎる」

右隣から低く柔らかな声で悪魔その3がユリアをたしなめた。

「何よ龍司。偉そうに。あたし、間違ったこと言ってないわよ」

「確かにそうかもしれないけど、言い方がいけないって言ってるんだ。自分のファンにはもっと優しくしないと。それに、彼女たちは不細工じゃないよ。」

そう言うと、悪魔その3こと龍司はにっこりと「千隼ファンクラブ」に微笑みかけた。

微笑みかけられた彼女達は、さっきまでユリアを憎々しく睨みつけていた顔から一転して、慎ましげに頬を染めていた。

「龍司さんつたら、なんてお優しいのかしら…！」

龍司の後ろで静かにお昼を食べていた「龍司ファンクラブ」がおしとやかに騒ぎ始めた。

落ちていた茶色の髪に、切れ長の瞳が印象的な整った顔立ち、程よい筋肉がついたバランスの良い体に、柔らかな物腰と笑顔の龍司はファンクラブ員達には「王子様」扱いされている。

そのせいかファンクラブ員には下級生の女子が多い。

「王子様」である龍司にふさわしくあるために、日々おしとやかでいることが「龍司ファンクラブ」の掟にあるらしい。

しかし、龍司が本当は「ドラゴン」というこの地域一帯を占める暴走族のトップというバリバリの不良であり、学校では生徒会長であるから王子様のように振舞っているに過ぎないということを彼女達は知らない。

「それにしても、千隼さんのファンクラブ員であるにもかかわらず、龍司さんの笑顔に頬を染めるなんて……はしたない人たちですね」

龍司が「千隼ファンクラブ」員に優しくしたのが気に食わなかったのか、「龍司ファンクラブ」のリーダー格の子が「千隼ファンクラブ」に喧嘩を売った。

「はしたない！？お上品ぶってるけど、あんた達だって千隼くんが涙目になってふてくされた時、「かわいい！」って小さくはしゃいでたじゃない！見てたのよ！」

「そつ、そんなことはありませんわ！妙な言いがかりをつけないで下さい！」

「おい、お前たち！うるさいぞ！ユリア様が静かにしろと言っただろうが！」

「マゾは黙ってなさいよ……！」

3つのファンクラブが、互いに揉め始めた。

この学校の生徒は必ずこの3つのうちのファンクラブのどれかに所属しているらしいので、この中庭には現在、全校生徒がいるということになる。

騒々しさは半端ない。

「ちょっと龍司。あんたのファンクラブが売った喧嘩のせいでこんなことになってんだから、あんたがどうにかしなさいよ」

ウインナーを口に放り込みながら、ユリアが龍司に責任をなすりつける。

この騒ぎの引き金の大元に自分も関係していることを完璧に無視している。

「もとはてめえが千隼のファンに喧嘩売ったのがいけねえんだろ。俺はそれを丸くおさめてやろうとしたただけだ。てめえがなんとかしろ」

柔らかな微笑みを浮かべたまま、不良丸出しの口調で言い返す龍司の目は冷たい光を浮かべて責任をユリアに戻す。

冷酷な悪魔を思い起こさせる笑顔だ。

けれど、そんな悪魔的な笑顔に似合わず食べているのは卵焼きだ。

「だってあれは、千隼のファンが常識をわきまえていないからいけないのよ。千隼がファンのしつけをきちんとしていたらならなかったことだわ」

ユリアがミニハンバーグを齧りながら、責任を千隼に回す。

「俺は関係ないだろ。それより、龍司がおれのファンを横取りしよ
うとして笑顔を振りまいたからいけないんじゃないのお?」

鮭のおにぎり片手にミートボールをほおばりながら、千隼がさらに
責任を龍司に回す。

「誰がてめえのバカ丸出しのファンなんか欲しがるかよ。あの笑顔
はあの場を丸くおさめるためだっつつたろーが。」

「お前のお上品ぶってるファンよりはマシだろ。あのお上品ぶりは
気持ち悪くて笑える」

「いや、てめえのブリっこの方が気持ち悪いだろ」

「ユリアの性格ブスよりはマシでしょ」

「龍司の「王子様」ぶりの方が気持ち悪くて反吐が出るわ」

「…」

「…」

「…」

いつの間にやら、ファン達の騒ぎの責任なすりつけ合いから話がずれている。

悪魔達は互いの欠点をけなし合うと、途端に無言になってお弁当を食べ始めた。

周りでファン達がまだ揉めている騒がしさの中心で、妙に静かなこの場の雰囲気は怖くて私はバカみたいにお茶をガブ飲みしているしかなかった。

「てゆうかさ、この騒ぎの責任は結衣にあるんじゃない？」

「は!？」

沈黙を破った千隼の言葉の突拍子のなさに、驚く。

危うくお茶を吐きだすところだった。

「…どうして私にあるのよ!どう考えても私は関係ないでしょ!？」

「だってさ、結衣の作ってきた弁当に入ってたウインナーがたこの形じゃなかったから俺はファンサービスを思いついたわけ。そこから俺のファンが騒ぎだして、ユリアとケンカして、龍司が丸くおさめようとして、それに龍司のファンが嫉妬しちゃって…。ほら、元は結衣のせいだ」

「なっ、何よそれ!言いがかりじゃない!」

どうしてそうなるのか理解できない。

しかも、お弁当を作ってもらってる立場のくせに、何て言い草なん

だ！

「確かにそうかしんねえな」

「あたしもそう思う」

龍司とユリアが千隼の突拍子もない言葉に納得する。

さつきまで、お互いに責任をなすりつけ合っていたのにこんな突拍子もない意見に納得するなんて、同じ悪魔同士、凡人の私には理解できない何かがあるのかもしれない。

…なんて変に納得してる場合じゃない！！！！

「何、納得してんのよ！絶対に私のせいじゃない！！私は関係ない！！」

「いや、結衣のせいだね」

「ああ、結衣のせいだな」

「結衣のせいよ」

3人の悪魔達は、誰もを魅了する艶やかな笑みを浮かべて私を見る。普通なら、思わずとろけてしまいそうなほど美しく完璧な笑み。

しかし、私は冷や汗が背中に流れるのを感じながら引きつった笑みを浮かべていた。

私は知っているのだ。

彼らの笑みが真に意味していることを…。

「お仕置きが必要だね、結衣」

千隼が可愛らしい声と笑顔で恐ろしい言葉を口にする。

「今回はどんなことさせようかしら？」

ユリアが優しい微笑みで毒気たつぷりの考えを呟く。

「今回も楽しませろよ」

龍司がにつこりと王子様スマイルで邪悪な思いを吐き出す。

心の底から楽しそうに笑う彼らを前に、私は固まっているしかかった。

いつの間にか、五段重ねの重箱に詰めてきたお弁当は作ってきた私が一口も食べないうちに跡形もなくなっていた。

いつもこうなのだ。

毎日毎日大食いの悪魔達のお弁当を作らされて、彼らのファンの騒ぎに囲まれて、最終的にはその騒ぎの原因を私のせいになされて、気がつけば私は自分で作ってきたお弁当を一口も食べられないまま、「お仕置き」と称した彼らの遊びの玩具にされるのだ。

私は溜息をつくと、憎たらしいくらい清々しく晴れた春の空を見上げ、その空のどこかにいるとされている神様に向かって、心の中で叫んだ。

どうか、私をこの悪魔達から救ってください！！！！！！

悪魔達、敵に出会う (1)

厳粛に響き渡る鐘の音によって授業の終了と放課後が告げられた。今まで静かだった校舎の中は生徒達のざわめきで一気に騒がしくなり、それを包み込むかのように放課後独特のゆったりとした午後の時が流れ始めた。

誰もが学校：正確に言うと「授業」という名の勉強が終わったという開放感で高揚する中、私は一人、行き場のない疲れと怒りでぐったりと机に突っ伏していた。

「今日も悪魔さん達に振り回されたの？」

頭上から降りかかってきた涼やかな声に顔を上げると、切れ長の目が印象的な整った顔が私を覗きこんでいた。その顔を見た途端、お昼休みに悪魔達から受けた行き場のない疲れと怒りが涙となってどっと溢れ出てきた。

「もう、こんな毎日イヤ！助けてよ、ゆうちゃん！！」

生活に疲れた主婦のような言葉を吐いてから、再び机に突っ伏した私の頭を「よしよし」とゆうちゃんが撫でてくれた。それに励まされるようにして、後から後から流れ出てくる涙と鼻水をすすりつつ、今日の昼休みに起きた出来事を話した。

悪魔達に振り回された後はこうしてゆうちゃんに話を聞いてもらうのが習慣となつてきているのだが、いつも話の道筋がぐちゃぐちゃで支離滅裂になってしまう。

それでもゆうちゃんは時々相槌を打ちながら静かに聞いてくれる。そして不思議なことに私の支離滅裂な話をちゃんと理解してくれるのだった。

所謂、「聞き上手」というやつなのだろうけど、それにしてもすごい能力だと思う。

「毎度のことながら悪魔さん達は自由だねえ」

一通り話すと、ゆうちゃんはそんな感想を漏らした。

温泉にでも入っているような、のほほんとした言い方だったので、思わず私は脱力してしまった。

「そんな言葉で片付けないでよ」

「あはは。ごめん、ごめん」

尚も、のほほんと笑うゆうちゃんにつられて、私の頬も緩んでしまった。

ゆうちゃんこと岡田優子は、無駄のないしなやかな体に、腰の辺りで切り揃えられた真っ直ぐな黒髪と、同じように黒く切れ長の目が印象的なシャープな顔立ちであるがゆえ、一見クールで人を寄せ付けないような一匹狼タイプの人に見えるけれど、実際は兎のように

穏やかでのほほんとした誰からも愛される和みキャラだった。

そして、そんなのほんキャラであるにも関わらず、ゆうちゃんは初めて会ったときから悪魔達の本性を見抜き、さらに彼らと互角にやりあえる希少な人物でもあった。

「それにしても、ゆうちゃんはよく悪魔達の本性を見抜いたよね」

ひとしきり話して泣き終わったところで、ゆうちゃんに初めて悪魔達を会わせた日のことを思い出しながら、そう呟いた。

悪魔達、敵に出会う (2)

ゆうちゃんに初めて悪魔達を会わせたのは入学式の日のことだった。正確には会わせたというよりも、会ってしまったという感じなのだけれど。

悪魔達は入学式の時から同級生はおるか、先輩達までその外見の美しさの虜にし、早くも彼らの独壇場を作り上げていた。その凄さたるや、彼らのファンクラブが入学式の次の日には出来上がってたというほどである。

そんな目立ちまくりの彼らと幼稚園も小学校も中学校も一緒だった私は、高校生活は地味に目立たず、安穏なものにしたいと思っていた。

それを手に入れるためには悪魔達と同じ高校へ行かないようにするのが前提条件だった。

悪魔達と過ごしてきたこれまでの日々の経験から、幼馴染だということだけで目立つことになり、僻みや妬みの対象となったり、彼らとの仲を取り持つ存在としていいように利用されたりすることが分かっていたからだった。

おまけに悪魔達によって玩具にされて様々なことをさせられるので、目立つも目立つ、むしろ悪目立ちしていく一方だった。

目立つことで、今までショックを受ける程の仕打ちに合ったことはなかったけれど、それでも僻みや妬み、そして利用してやろうという気配は否応なく感じてきた。

だからこそ、高校は悪魔達と別の学校へ入ろうと思いつく限りのあらゆる手を尽くし、悪魔達に知られないようにして密かに入学したのがこの学校だったのだが、どうしてだか入学式に悪魔達が私と同じ新人生としてこの学校に来ていた。
その姿を見た時、私はショック死するんじゃないかと思うほどの衝撃が体を突き抜けるのを感じた。
そして本当に気を失って倒れた。

次に意識を取り戻した時、私の目に飛び込んできたのは真っ白な天上だった。
しばらくぼんやりとその白さを見つめていると、横から涼やかな声に話しかけられた。

「気がついた？」

声がした方を向くと、切れ長の目が美しい、整った顔の女の子が椅子に座ってこちらを見ていた。
これがゆうちゃんである。

「ここは？」

「保健室。あなた入学式が始まる直前に倒れたのよ」

「あなたは？」

「私？私は岡田優子っていうの。周りには「ゆうちゃん」なんて呼ばれてる。たまたまあなたの隣にいたから、私がここまであなたを

運んできたの」

「えっ?! あなたが?!」

私はまじまじと彼女を見た。

どう見ても、意識を失って重たいはずの私のここまで運ぶほど力があるようには思えない。

「そう。私が運んできたの。しかもお姫様だっこでね。これでもけっこう力持ちなのよ」

そう言っつて悪戯つぱく笑う彼女は、クールそうに見える外見とは裏腹にとても人懐っこく見え、何だか安心した。

安心しすぎて、お姫様だっこされながら連れてこられたという衝撃の出来事に対するツツコミを入れるのを忘れていた。

「でも、重かったでしょう? ごめんね」

「平気、平気。むしろ入学式なんてかったるいもの抜け出せてラッキーだったよ」

「ずっと、側にいてくれたの?」

「そりゃ、ほっとけないでしょ」

「…ありがとう」

のほんと笑う彼女のその笑顔と心の温かさに、思わず涙が出そうになった。

私は感動しやすく、泣き虫なのである。

「やだ、泣かないでよ」

「ごめん、嬉しくて…」

「あはは。あなた、カワイイね。ねえ、名前は？」

「安藤結衣です」

「結衣ちゃんか。これからよろしくね」

「うん！」

思いがけない出会いで出来た友達に有頂天になった瞬間、保健室の扉が開く音がした。

見ると、悪魔達が揃いも揃ってこちらに向かってくるところだった。有頂天だった気持ちは音をたてて崩れ落ち、消え去った。

「ゆいー、倒れてんだってえ？大丈夫う？」

千隼が甘ったるい声を出しながら抱きついてくる。

この声を聞く度に、千隼の猫かぶり声を主成分としたハチミツがあるとしたら、甘すぎて食べれないだろうなあ、なんて考えが頭をよぎる。

「どこが悪いのかい？」

龍司が憂いを帯びた顔で覗きこんでくる。
夜はこの顔が暴走族同士の勢力争いで、血に濡れるのだから恐ろしい。

「倒れるなんて、だらしないわね」

ユリアが腕を組みながら、高飛車に言う。
まるで兵士を叱咤する女王のようだ。

倒れた理由はお前達のせいだと言ってやりたいけど、一介の兵士の声は女王には届かないのが相場である。

この時、ユリアは素が女王様キャラなのでいつも通りだったけれど、千隼と龍司はゆうちゃんがいたので猫を被っていた。

「君は？」

それぞれ言いたいことを言い終わると、龍司がゆうちゃんに問いか

けた。

その問いかけには私が答えた。

「彼女は岡田優子ちゃん。私を運んでくれて、しかも今まで付き添ってくれてたんだ。友達にもなったの」

「へえ……」

一瞬、龍司の顔が警戒するように曇った気がしたけれど、すぐに猫かぶり中の優しい王子風の顔に戻り、にっこりとゆうちゃんに笑いかける。

あの、誰をも魅了する王子スマイルだ。

「それは結衣がお世話になって。どうもありがとう」

「いいえ。べつに結衣ちゃんはあなたのものじゃないんだから、あなたにお礼言われる筋合いはありませんし。それに、その作り笑いやめて下さい。不快です」

のほほんとした柔らかな笑顔と声で放たれたゆうちゃんの言葉は、明らかに喧嘩を売っていた。

空気が凍るような音がして、龍司の笑顔が、固まった。

私も、驚いてゆうちゃんを見つめる。

今まで、龍司の笑顔にほだされず、ましてや喧嘩を売る女の子なんて初めてだった。

「ちょっと、なによその言い方。別にお礼言うくらい、いいじゃない」

ユリアが噛みつくように、言い返す。

それに対してもゆうちゃんは柔らかな笑顔と声で棘のある言葉を吐いた。

ユリアの美しさと言葉のキツさにたじろかずに言い返す女の子も初めてだった。

「私はあなたじゃなくて、こちらに言っているんです。口を挟まないでもらえませんか？それとその高飛車な態度、気に障るんでやめてくれませんか？」

「なっ！？」

ユリアの金色の瞳に、怒りの炎が灯り、爛々と輝く。

美人が起こると普通の人より、迫力があるのだとこの時初めて知った。

「まあまあ。落ち着こうよう、二人とも。ねっ？」

「天使の笑顔」と呼ばれる甘く愛らしい笑顔で場をおさめようとする千隼に対しても、ゆうちゃんは龍司とユリアに対するのと同じような態度をとった。

「その嘘くさい甘ったるい口調と笑顔、今すぐ引つ込めてくれません？ 寒気がします」

千隼も龍司と同様に、笑顔のまま固まった。

千隼の笑顔に蕩けなかった子も初めてだった。

急激に保管室内の温度が下がっていく気がして、思わず私は身震いしていた。

龍司と千隼とゆうちゃんは笑顔で向かい合い、ユリアは怒りで燃え上がった視線をゆうちゃんに向け、私はぼかんとした顔でただゆうちゃんと悪魔達の無言のやり合いを見ている…。

それはほんの数分かあるいは数秒のことだったけれど、私には恐ろしく長い時間に思えた。

そして、この無言のやり合いに終止符を打ったのは、保健の先生だった。

「あら、たくさん人がいるわね」

再び扉が開く音がしたと思ったら、黒ぶち眼鏡がよく似合う、理知的な顔立ちの若い女の先生がそう言いながら入ってきた。

真っ白な白衣を身につけているので、一目で保健の先生だと分かった。

「具合はどう？」

彼女は無言のやり合いをするゆうちゃんと悪魔達との間の空気にはまったく気がつかなかったらしく、バツサリとその空気を断ち切るようにして真っ直ぐに私のもとにやって来た。

鈍感とはいかに恐ろしく、それでいて幸運なものでもあるのだこのときほど感じたことはなかった。

「あ…はい。大丈夫です」

「そう。それなら良かった」

柔らかに微笑むと、保険医は辺りをくるりと見回した。

「あなたたち、新人生でしょう？皆もうとくに帰ってるわよ。あなたたちも早く帰りなさい」

その言葉に対する返答をゆうちゃんも、悪魔達もする気配がなかったので、私が代わりに小さく「はい」と答えておいた。

それに満足したのか、軽く頷くと保険医は備品の整理を始めた。ゴソゴソと、保険医が動く音だけが部屋に響く。

「…それじゃあ、私はもう帰るね」

軽く息を吐き出すと、ゆうちゃんは椅子から立ち上がり私に向かってほほ笑んだ。

「鞆はここに置いてあるから。また明日ね、結衣ちゃん」

「あつ、うん。また明日ね…ゆうちゃん！」

少々のためらいの後、愛称で呼ぶと、ゆうちゃんは嬉しそうに笑って保健室を出て行った。

その姿を悪魔達は無言で見送っていた。

これがゆうちゃんと悪魔達の出会い、さらには私とゆうちゃんの出会でもあるのだが、この後、不機嫌になった悪魔達の玩具にされたのは言うまでもない。

この入学式があった日は、悪魔達のことを愚痴れて、さらに彼らと言い合えることができるという私にとっては天使のようなかけがえのない友を得た素晴らしい一日だったのだが、悪魔達にしてみれば彼らの思い通りにならない初めての「敵」に出会った最悪な一日だったのかもしれない。

悪魔達、玩具を呼び出す (1)

あの強烈な入学式の日を一通り思い返したところで我に帰ると、ゆうちゃんは窓の方に顔を向け、ぼんやりとしていた。

泣きすがって愚痴を聞いてもらったのにも関わらず、勝手に思い出に沈みこんで今までゆうちゃんをほったらかしにしていたことに気が付き、慌てて謝ろうとした瞬間、明け放たれた教室の窓から一陣の春の風が迷いこんで来た。

その風は窓にかかっていた真つ白なカーテンを揺らすと、次いで背中まで伸びた真黒なゆうちゃんの髪を揺らした。

淡い午後の日差しを受けたゆうちゃんの長い黒い髪は、驚くほど艶やかな光沢を放ちながら宙を泳ぎ、眩しいほど輝いて見えた。

眩しい長い黒髪を風にそよがせ、切れ長の目を気持ちよさそうに細めているゆうちゃんの横顔は何とも言えず美しく、思わず見惚れてしまった。

あの入学式の日以来、ゆうちゃんは私の天使となっただけでなく、憧れともなったのである。

ああ、私に少しでもゆうちゃんのような美しさと悪魔達に立ち向かえる強さと賢さがあつたならどんなに良かっただろうか。

あの美しく性悪な悪魔達と毎日やり合わなければならないのは私なのに、神様はどうして私に人並みのものしか与えてくれなかったのだろうか。

ゆうちゃんのようにあつたなら、どんなに良かったことが…。

「…どうしたの？」

風が止み、こちらに顔を向けたゆうちゃんの顔が怪訝な表情で曇った。

綺麗な弧を描いた眉を顰めた顔を近づけ、覗き込むようにこちらを窺がう。

そうされて初めて、私の顔がゆうちゃんに見惚れるあまりに、いかに面白いことになっていたかに気付かされた。

「え?! ああ、何でもないよ!!」

まさか、見惚れていたなんて言えるわけがない。
恥ずかしすぎる。

「本当に? 何だかすごいアホな顔してたよ」

大げさに手を振って否定する私に向かってそう言つと、ゆうちゃんは悪戯っぽく笑った。

その笑い方はあの入学式の日に見たものと似ていて、また懐古の念が湧いた。

「本当に何でもないから」

あはは、と何とか笑って誤魔化していると、ピンポンパンポーンと呼び出しの放送音が教室の隅に設置されているスピーカーから聞こえてきた。

「生徒会より、呼び出しです。2年A組、安藤結衣さん。至急、生徒会室へ来てください。繰り返します…」

放送はまだ続いていたが、私は耳を塞いだ。

何故ならスピーカーから流れ出ている、いかにも優等生らしいその声は…。

「この声…生徒会長か」

完全に放送が終わったと思えるだけ、充分に時間をとってから耳をふさいでいた手をどかすと、何気ないゆうちゃんの呟きが聞こえた。次いで、女子の異常なまでのラブコールが各地で上がった。

ゆうちゃんの呟きと女子のラブコールが指し示す人物を思い浮かべると、春だというのに寒気がした。

「ど、ど、どうしよう、ゆうちゃん！龍司からの呼び出しなんてろくな呼び出しじゃないよ！！」

「そうだねえ。なんてたって、悪魔さんだもんね」

「お願いだから、そんなにのほほんとししないで、もうちょっと親身になってえ！」

あまりの動揺で半泣きの私に対し、相変わらずゆづちゃんはのんびりとしていた。

そののんびりさが今の私にとっては心底羨ましい。

「うーん…。じゃあ、行きたくないなら行かなければいいんじゃない？」

「それはそうなんだけど、行かなきゃ行かないで後が怖いんだって！今までのあいつらの私に対する嫌がらせの数々…話したでしょ？」

「そうだねえ」

「ああ！どうしよう！-！」

もはやパニック状態の私がゆづちゃんにあたりつつ、ごちゃごちゃと考えていると、教室の扉が勢いよく開かれ、十人ほどの体格の良い男たちがものすごい勢いで私めがけてやって来た。

悪魔達、玩具を呼び出す (1) (後書き)

はじめまして、桐龍朱音です。

今まで悪魔達が活躍する場がありませんでしたが、これから先は増える予定です。

悪魔達が結衣を「玩具」にして「遊ぶ」話もちよいちよい入れていくと思うので、もしも読んでみたい「遊び」のネタがありましたらお聞かせください。

亀の歩みの如く遅く、稚拙な文章ですが最後までお付き合いしてくださると嬉しいです。

良ければ感想などもお聞かせください。

悪魔達、玩具を呼び出す (2)

「なっ、何なんですかあなた達！」

教室中にヒステリックな金切り声が響き渡る。

それを発しているのはまぎれもなく自分なのに、自分の声じゃないような気がした。

それほど今の私の声はパニックでおかしなことになっていた。

いきなり数十人もの体格のいい男たちに辺りを取り囲まれたら、誰だって驚きと恐ろしさでおかしくなるに決まってる。
ましてや私はか弱い女の子なんだぞ！

「俺達は『ユリア様ファンクラブ』の会員だ。ちなみに俺は会長の吉原っていうもんだ」

私の目の前に高圧的に立ちふさがっている、坊主頭の一際体格のいい男が野太い声でそう宣言した。

細く鋭い彼の目に睨みつけられると、まるで蛇に睨まれた蛙のような気持ちになった。

ものすごく怖いんですけど…。

「安藤結衣、お前をユリア様の命により生徒会室へ強制連行する」

「ええ！？嫌ですよ！私行きたくないです！！」

人の本音は思わぬ出来事のと きに出るものだ と誰かが言っていたけど、どうやらそれは本当だったらしい。

さっきまで（行きたくはないけど行かないと後が怖いから）行こうかどうしようかと、うだうだ悩んでいたけれど、こうして突拍子もない出来事に遭遇した今、思わず本音がポロリと出てしまった。

吉原さんに対する恐怖も忘れて、本当にびっくりするくらいポロリと出てしまった。

「問答無用！ユリア様の命は絶対なのだ！！」

「嫌です！！！」

一度漏れた本音は一瞬で確固たる意志へと変わっていた。

何とか逃走をしようと鉄壁の防御のように立ちふさがる男たちの間にある僅かな隙間めがけて突撃する。

思わぬ私の行動に、男たちはやや面喰ったらしくほんの少しよろけた。

私はその隙について、男たちの包囲網から抜け出した。

よっしゃあ！！と心の中でガッツポーズをしながら、開け放たれている教室の扉へ一目散に駆けていく。

私と扉の間を遮るものは何もない。

男たちに捕まらない自信はある。

だって、私は足が速いから。

悪魔達が日々私に仕掛ける「遊び」と称した嫌がらせの数々から逃

げ回っているせいか、私はけっこう足が速い。

何てたつて悪魔達の「遊び」から逃げることは私にとって生死を決するくらい命がけのことなのだから足が速くなるのは当然といえば当然のことなのかもしれない。

生物は己の身を危険から守るためなら進化していくものなのだ。

けれどおかしなことにこれまでどんなに私が進化しても悪魔達から逃れられたことはない。

いつも最後の最後で捕まって遊ばれてしまうのだ。

悪魔達の運動神経は尋常じゃないことがまず大きな原因であることは間違いない。

けれど一番の原因は、悪魔達の異常な運動神経を知りつつも「もしかして」という淡い望みのもと、逃げずにはいられない私の思いを知ってか知らずか、最後の最後までわざと捕まえないようにして「逃げ切れるかも」という一縷の希望を抱いた私を打ちのめすのを愉しむという悪魔達の悪魔的心であると思われる。

…腸が煮え繰り返るほど腹立たしい。

「^{ターゲット}目標が逃げたぞ！フォーメーションBだ！！」

後ろから吉原さんの野太い声が私を追いかけてくる。

けれど足音は聞こえない。

追う気がないのだろうか？

というか…

フォーメーションBって何？

「了解！！」
ラジャー

え？

今、扉の方から声が聞こえた気が…。

「ええ?!」

突如目の前にムキムキの筋肉野郎が現れた。

まだ春だというのにこんがりと焼けた体、無駄に盛り上がる筋肉、キラリと光る白い歯…。

そんな絵に描いたようなボディービルダー風の男が目の前に…。

全力で扉を目指していた私は自分のスピードを失速させることができず、ドンッ！と思いつきりそのボディービルダー野郎にぶつかった。

厚い筋肉の体に跳ね返された私は強かに尻もちをついた。

「いつ、痛い…」

「又ハハハハ！！思い知ったか！俺の筋肉の強さを！」

シャキーン、と切れの良い音が聞こえてきそうなほど完璧なマッスルポーズをとりながら笑うボディービルダー野郎。
正直、色々ついていけない。

「よくやったぞ、増田。これでユリア様の命を達成できる」

すぐ後ろでそう吉原さんが言ったかと思うと、不意に体が宙に浮き上がった。

一瞬の浮遊感の後、私の体が落ち着いたのは何とも信じられない場所だった。

あまりのことに驚きで声が出ない。

まさに頭の中はショート寸前だ。

「よし、行くか」

「ちょ、ちょおおおっと待ったああ！」

何とか声が出たのはいいが、ちょっと大きく出しすぎた。恥ずかしい。

「何だ？」

平然とした顔と声で返事をする吉原さんを私は精一杯、睨みつける。この人はどうしてこうも何食わぬ顔で平然としてられるのか。私をお姫様だっこしているという、何とも恥ずかしい状況であるのに。

「何だ？じゃないですよ！恥ずかしいんで降ろしてください！」

「それはできない。また逃げられたら困るからな。こうしてれば俺ががちりと捕まえていられるし、恥ずかしさで逃げられもしないだろう？」

にやり、と細い目をもつと細くして笑う吉原さん。

何故だか睨まれるよりも数百倍恐怖を感じた。

「で、でも吉原さんは恥ずかしくないんですか？こんなお姫様だっこなんて……」

「ユリア様の命を達成するためならば恥ずかしさなどかなぐり捨ててやるわ！」

どんだけユリアのこと崇拜してんだよ！？

と、脳内でツツコミを入れつつも私はとりあえず黙ることにした。捕まってしまった以上、生徒会室へおとなしく連れていかれるしかないだろう。

何てたつてがちり抱きしめられているし、吉原さんは怖いし、お姫様だっこは恥ずかしいしで肉体的にも精神的にも逃げる力を失っている。

「あの、ひとつ聞いてもいいですか？」

吉原さんにお姫様だつこで運ばれている間、無言というのもなんなので気になっていることを聞いてみることにした。

「何だ？」

「…フォーメーションBって何なんですか？」

逃げ出そうとした時、後ろから聞こえてきた謎の言葉。

それが発された直後あのボディビルダー野郎…もとい、増田さんが現れたのが何とも気になる。

「ああ、それはなお前を捕まえるための陣形の呼び名だ」

「陣形？」

「そうだ。ユリア様がな、お前はきつとおとなしくは連行されないだろうから何パターンか捕まえる方法を用意しておいた方がいいとおっしゃったんだ。だから俺達はそのパターンをフォーメーションという陣形で表したんだ」

ユリア…。

なんて余計な助言をしてくれちゃってるんだ。

「…そうなんですか。ちなみにそれはどんな陣形なんですか？」

「フォーメーションAは鉄壁の防御のようにお前を取り囲む陣形、BはもしもAが失敗しお前が逃げた場合、出入り口に待機させていた者に捕まえさせる陣形だ。他にも色々と考えていたんだが、幸いお前はBで捕まってくれたから最終陣形のフォーメーションJ、お姫様だつこで今連行しているところだ。他の会員は後ろからついてきている」

「J?!」

「ただフォーメーション考えたんだよこの人たち!!
というか何て、何て…」

「何て無駄なことしてるのかしら」

不意に、吉原先輩の右側（私の頭がある方）から聞き覚えのある涼やかな声が聞こえた。
この声は…間違いない！

「ゆうちゃん?!」

体を動かしたらバランスを崩してしまうので、そのままの姿勢で頭上（吉原さんの右側）に向かって声をかける。

「結衣、なかなか面白い体験してるわね」

「面白くなんかないよ！恥ずかしくて死にそう。助けて…」

「それは無理よ。私も連行されてるからね」

「え?!」

何でゆうちゃんまで?

というか、連行してもしかしてゆうちゃんも…。

「私はお姫様だっこじゃないけどね」

私の脳内を覗いたかのようなゆうちゃんの言葉。

それはほんの少し悪戯っぽい響きを持っていた。

もしかして…ゆうちゃん、私のこの状況を面白がってるのか?!

「…何でゆうちゃんまで連行されてるの?」

不満を隠しつつも隠し切れていない私の声。

ああ、私ってまだまだ子供っぽい…。

いや、実際子供だけど。

「さあ?何かついてきてくれっていうから従っただけ」

のんびりとしたゆうちゃんの答えに私の不満はしぼんでいった。

ゆうちゃんのこういう「長いものには巻かれる」的なほんとし

たところにはいつも脱力してしまうのだ。

どんなに苛立つことがあっても、ゆうちゃんののほほんとした声と話し方に私はいつもほだされてしまうのだった。

「どうしてゆうちゃんも連行してるんですか？」

今度は吉原さんに向かって問いかける。

何度見ても、吉原さんの細く鋭い瞳は怖い。

「ユリア様が連れて来いとおっしゃったからだ」

「ユリアが…？」

何でだろう。

ものすごく嫌な予感がする。

「さあ、着いたぞ」

「生徒会室」というプレートがついた真っ白な扉。

今まで後ろにいたユリアファンクラブの会員の一人が、両手が（私をお姫様だっこしているせいで）ふさがっている吉原さんの代わりにその扉を開く。

「やあ。遅かったね、結衣」

まるでどこかの王宮のように煌びやかに装飾された広い部屋。

その中で午後の柔らかな日差しを受けながら、にっこりと艶やかな笑みで私を迎える王子様。

目の前に広がるのはまるで物語に出てくるような美しく素晴らしい世界。

「待ちくたびれちゃったよ」

けれど私は知っている。

ここは魔窟。

王子様は見目麗しき悪魔なのだ。

悪魔達、玩具を呼び出す (3)

「皆さん、ご苦勞様です。もう帰って下さって結構ですよ」

王子様がそっぴいながら『ユリアファンクラブ』の会員たちに柔らかに微笑みかける。

相変わらず儚くも輝かしい完璧な「王子様スマイル」。

後ろの方で次々と息を呑む密やかな音が聞こえる。

同性にも効果抜群だなんて、この「王子様スマイル」は本当にとんでもない代物だ。

「か、会長…僕達帰ってもいいんでしょうか…？それにその、これでユリア様からの命令は達成されたことになるんでしょうか？」

会員の一人が後ろから恐る恐る吉原さんに確認をとる。

とりあえず、「王子様スマイル」にやられながらも「ユリアファンクラブ」としての自覚はちゃんと残ってたらしい。

「…大丈夫だ。会長の言う通りにしとけ」

「は、はい！」

何故だか分からないけど、吉原さんの声には妙な緊張感が漂っていた。

会員たちもそれを感じ取ったのか、言われた通り速やかに生徒会室を出て行った。

最後に出て行った会員がドアを閉める音が室内にやけに大きく響いた。

王子様は相変わらず「王子様スマイル」を浮かべてこちらを見ている。

そんな王子様を吉原さんは額に汗を滲ませながら緊張した面持ちで見返している。

蛇のような細い瞳には、私を見るときにあつた真つ直ぐな鋭い光は無く、代わりに微かに揺れる弱々しい光が滲んでいた。

何だか今の吉原さんの瞳は泣き出しそうな幼い子供の瞳とよく似ている。

そのせいか「慰めたい！」という衝動に駆られずにはいらなかった。

見事に輝くその坊主頭を「大丈夫だよ」と撫でてあげたい…。

そんなことを考えていたせいで、気がつけば吉原さんの頭に向かって手を伸ばしかけていた。

もう少して手が届く——…

何て思ったまさにその瞬間。

「吉原ア、てめえ結衣を連れてくんのにどんだけ時間かかってんだよ?」

耳に響くは乱れた言葉遣いの低く鋭い冷徹な声。

その声に恐る恐る王子様の方へと視線を向けると、そこには「王子様」の仮面を脱ぎ捨てた見目麗しき「龍司」という名の悪魔がいた。

「俺は10分以内に結衣を連れて来い！ つつたよなア？ ああ？」

「はい…そうおっしゃいました」

体格のいい吉原さんがまるで仔ウサギのように小さく震えている。見事な坊主頭は尋常じゃないほどの汗で豆電球のように光り輝き、ちゃんと前が見えているのだろうか？と心配になるほど瞳がおろおろと揺れている。

「だったらどうして15分もかかってんだア？ それともてめえにとつては10分以内だとも言うのか？」

「いいえ、そんなことは…！ 申し訳ありませんでした！」

吉原さんが思いつきり頭を下げる。

ものすごい勢いで迫ってきた吉原さんの顔を私はのけ反るようにして何とか交わした。

謝るのに必死で吉原さんは私をお姫様だっこしていることをすっかり忘れていたようだ。

気がつくのがあと一瞬遅かったら私は確実に吉原さんとキスしていたことだろう。

吉原さんには失礼だけれどこんなことでファーストキスを失いたくない。

「つーかよ、てめえいつまで結衣のことそうやって抱いてるつもりだ？」

龍司のその一言に吉原さんは人形のようにすべての動きをピタリと停止させた。

そしてその一瞬後にもものすごい速さで私をその腕から投げ出すようにして解放した。

急に投げ出されたので、私は受け身をとることができず、強かにお尻を床に打ちつけて着地した。痛みのあまり涙で視界が歪む。

「すまん！大丈夫か！？」

声にならない呻き声を洩らしながら痛がる私の様子に、吉原さんが慌てて近づいてこようしたが、何故だか途中でピタリと凍りついたように動きを止めた。

「無様な姿だなア、結衣？」

いつの間にも移動したのか、龍司が私のすぐそばにしゃがみ込んでいた。

おまけに、さも面白い玩具を見つけたかのような満面の笑みを浮かべている。

楽しくて楽しくてしょうがないといったその笑顔は、獲物を目の前にした野獣が浮かべる悦楽の表情に似ていた。いつそ残忍ともいえる喜びの顔だ。

「…あんた、完全におもしろがてるでしょ？」

「心外だな。心配してわざわざそばまで来てやってるっていうのによ」

「わざわざって… たった数歩の距離じゃない！それに、心配してるならそんな満面の笑顔なんて浮かべないでしょ！？もっとちゃんと心配そうな表情しなさ…」

「こんな風に？」

「え？」

一瞬にして龍司の端正な顔に浮かんでいた悦楽の表情が掻き消え、代わりに憂いを帯びた苦しげな表情へと変わる。

微かに潤む切れ長の瞳が妙に色っぽくて、本性を知っているにもかかわらず見惚れてしまった。

「結衣、どこか痛いところはない？大丈夫？」

そつと両手で顔を包まれる。
優しいその手と色っぽい瞳に捕らわれて、視線を反らせない。
どんと龍司の端正な顔が近づいてくる。

「ねえ、結衣…？」

顔を通り過ぎ、耳元へとたどり着いた龍司の唇が微かな溜息とともに囁きを洩らす。
低くて甘い魔性の声で。

「…あつ」

思わず声が出てしまった。
しかもその声は今まで出したこともないような甘く縋るような声だった。

耳元で、ふふ、と軽やかに笑う声が聞こえた。
耳をくすぐるようなその笑い声が何だかとても心地よかった。

「——感じちゃった？」

言われてすぐにはその言葉の意味に気が付けなかった。
2、3秒置いて、ようやく気付く。

「んなつ!？」

顔がどんどん熱くなっていく。

恥ずかしすぎてそのこと以外何も考えられず、言葉が出てこない。とにかく顔を包んでいる悪魔の手から逃れようとするが、ものすごい力で挟まれ返されて逃れられない。

そんな風に挟まれて、私の顔はきつととんでもなく面白い顔になっているに違いない。

痛いやら恥ずかしいやらで涙が零れそうだ。

「そうか、そうか。結衣はこういう感じが好きなのか」

悪魔の顔にはまた満面の笑みが浮かべられていた。
今度はその笑みの中に意地の悪さが滲み出ている。

「お前の弱点、一個増えたな」

そう言つて、にやりと一際意地の悪い笑みを浮かべてから悪魔はようやく私の頬を解放した。

恥ずかしさと、弱点を知られた屈辱感のあまりそれ以上悪魔の顔を見ることができなくて、思いつき顔をそむけるしかなかった。弱点なんてたくさん知られているけれど、こんなに恥ずかしい思いをさせられて知られた弱点はこれが初めてだ。

「あれ…？吉原さん…？」

そむけた先で目に映ったのは、指先まできちんと伸びきった直立不動の吉原さん。

よほど力を入れて直立しているのか体が微かに震えている。

相変わらず見事な坊主頭は汗で光り輝き、目線は斜め上を睨むようにして見つめている。

明らかに不自然だ。

「吉原さん？大丈夫ですか？」

立ち上がり、吉原さんの元へ行って声をかけてみたが応答ナシ。本当に、どうしたというのだろうか？

「吉原ア、そんなところにつつ立ってねえでさっさと千隼とユリア呼んで来い」

「はい！了解しました！！」

龍司の一言に、吉原さんは直立不動だったのが嘘のように瞬時にドアの向こうへと消えて行った。

私のことは無視したくせに、何で悪魔の言うことは聞くのだろうか？

…そういえば、最初から吉原さんはおかしなくらいこの悪魔に低姿勢だったような…。

しかも、色々ありすぎてスルーしてたけど悪魔は吉原さんの前で本性を隠していなかった。

学校では（というか本性を知っている人達の前以外は）いつも徹底的に本性を隠して「王子様」として過ごしているはずなのに。

「龍司、あんた吉原さんと知り合いなの？」

「知り合いっつーか、アイツは俺のチームのナンバー2だ」

「ええ！？」

「チーム」とは龍司がトップを張ってる暴走族「ドラゴン」のことだ。

そのナンバー2ってことはつまり、吉原さんは――…

「龍司の次にチーム内で強いってこと？」

「まあ、そういうことだな」

ナンバー2の人でさえ、あんなに低姿勢で接するなんてコイツの実力はどれほどのものなんだろう…。

「そんなことよりもよ、ユリアと千隼が来たら始めるからな」

「え？」

改めて龍司の悪魔的強さに恐ろしさを感じたところでかけられた一言。

一気に夢の中から現実に引き戻されたような気がする。夢と言っても、今までのことは悪夢のようなものでどのみち最悪なのは変わりがないのだけれど。

「始めるって…何を？」

わざととぼけてみる。

答えなんて分かっているけど、1分でも1秒でもこの現実から目をそむけていたい。

「分かってんだろ？」

悪魔が嗤う。

恍惚にも似た邪悪な笑みを浮かべて、容赦なく現実を突きつけようとする。

その姿はまるで舌なめずりをする猫のように卑しくて、それでいて美しい。

「俺達とこれから楽しい楽しい『遊び』を始めんだよ」

悪魔は嗤い続ける。

密やかに、鮮やかに。

悪魔達、遊びを決める

「おつまたせー!!」

勢いよく背後の扉が開かれ、甘ったるい声が聞こえた。

その声で振り返らなくても誰が来たのかなんて分かったけれど、一応振り返ってみる。

どうか思い描いた人でありませんように、なんて夢い願いを込めて…。

「今日はどんな『遊び』をしようか、ゆい？」

儚い夢は無残にも打ち砕かれた。

振り返った先にいたのは思い描いた通りの人物、千隼だった。

「あれえ、なんでそんな元気ない顔してんの？僕に会えて嬉しくないの、ゆい？」

大きな瞳を子犬のようにくりくりと輝かせて近づいてきた千隼を私はぼんやりと見つめる。

本当に外見だけは天使のように無邪気で愛らしい。

思わず抱きしめて頬ずりしたくなってしまっほだだ。

背後に金色のオーラさえ見える気がするよ…。

「おい、俺がここまでサービスしてやってんだからいい加減そのしよぼくれた顔やめろよ。辛気くせえったらありやしねー」

「あんたねえ…」

愛らしい天使の顔は一瞬にして美しくもガラの悪い悪魔の顔となった。

背後に見えた気がした金色のオーラは、今やどす黒いオーラとなつてこの目にはつきりと見える。

「本当よねー。こつちまで気分が暗くなるっつーの。そんな顔するとブスな顔が余計にブスになるわよ」

遅れて生徒会室に入ってきたユリアが千隼の言葉に賛同する。

きゅっ、と引き締まった腰に手を当てて不快そうな表情を私に向けてくる。

ユリアはいつでも誰に対してもこんな態度だけど…その言葉はひどい。

いくら本当のことだって、「ブス」なんて言葉は乙女に向かって言うてはいけない！

「ちょっとユリア！ブスはいくらなんでもひどいんじゃないの!？」

「あら？本当のこと言っただけだよ。それとも何、あんた自分が美人だとも思ってたんの？この私を目の前にして？」

ユリアの完璧な顔が目の前に迫って来る。
相変わらず透けるように白い綺麗な肌してるし、目は大きいし、鼻筋は通ってるし…こんなのと私の顔が比べられるはずがない！
悔しく思いながら押し黙るしかなかった。
そんな私を見て、ユリアは満足そうに微笑む。
女神のような容姿をしながら、その微笑みは悪魔のようにえげつない。

「あははっ！結衣がユリアに顔で勝つなんて無理だよ。男の僕にだって勝てないのにさあ」

にやにやといやらしい笑みを浮かべた千隼がユリアの横に立つ。
そしてにやにや笑いを引つ込めると、蜂蜜のように甘ったるい笑みを浮かべた。

ファンの間で騒がれている「天使の微笑み」というやつだ。
その顔は男とは思えないほど愛らしい…。
完全に負けてるよ、私！！

チッキショー！！！！！！

「千隼、ユリアそれくらいにしとけ。『遊び』の時間が短くなる」

後ろから龍司に窘められ、二人はにやにや笑いを浮かべながら龍司の側へと移動する。

悪魔三人が揃うとやっぱり迫力がある。

ああ、何で私みたいな平凡な子が彼等と幼馴染なのか…。

「それじゃ『遊び』を始めようか、結衣？」

龍司が微笑みながら問いかけてくる。

もちろんその問いに対する私の拒否権なんてない。

拒否したって、受け入れるまで悪魔達は私を解放しないのだ。

その恐ろしくキレる頭脳と驚異的な身体能力、そして息を呑むほど美しいその容姿をフルに使って私を玩具にして遊ぶことを何よりの愉しみとしているのだから。

「今回の『遊び』は『鬼ごっこ&宝探し』だ」

「『鬼ごっこ&宝探し』？」

「そう。お前は鬼から逃げて校内のどこかに隠されている宝箱を見つけてくるんだ」

「何だか幼稚園児がするような遊びだなー」なんて思っただけで侮つてはいけない。

彼等が考えだす遊びは、たとえ子供がするようなものであっても常にハイレベルなのだ。

それこそ（私にとっては）命懸けの。

「宝箱：それってどんな形してるの？」

「宝箱そのものってカンジの形だ」

「何それ？」

いい加減な答えに顔を顰めると、千隼がクスクスと笑いだした。
人の顔見て笑うなんて失礼だぞ！

「大丈夫だつて。おバカさんな結衣にも一目で分かるようなものにしておいたからさあ」

「なっ！？」

「私達って優しいでしょう？結衣のためを思つてわざわざ「宝箱！」ってカンジのものを探して買ってきたのよ？」

そう言つてユリアはふう、っと憂いを帯びた顔で溜息を吐く。
その姿を見てユリアの虜にならない者は私を除いて他にはいないだろう。

けれど彼女の本性を知っている私は騙されない。

「どうせファンクラブ員にでも買いに行かせたんでしょ？」

「結衣ったら！！そんなこと言うなんて酷いわ！！」

よよよ、と艶やかに泣くユリアを私は呆れた思いで見ている。
誰がそんなウソ臭い泣き方に騙されるか！

「…何よ、もつとノリを合わせなさいよね。まったく、これだから空気が読めないおバカさんは困っちゃうわ」

何の反応もしなかった私にふてぶてしく文句を言うユリア。
まったくどこまで自己中心的な女王様なんだか。

「…とにかく鬼から逃げて宝箱を探せばいいのね？」

ご機嫌ナナメの女王様はほつといて、話を進める。
拒否権がないのならさっさと済ませて家に帰りたい。
この地球上で唯一彼らの干渉がないのはきつと我が家だけだから。

「その通り」

につこりと王子様スマイルで微笑む龍司。
コイツが私に向かってそんな笑顔をする時は、誰か（龍司の本性を知らない人）が側にいる時か、何か思惑がある時だけだ。

嫌な汗が背中を伝う。

「ねえ…そう言えば、鬼って誰？」

恐る恐る気になっていたことを問う。

さつきから宝箱の話はしても鬼の話はしなかった。
嫌な予感がする。

「鬼はこの学校に残っている全校生徒だ」

「ええっ！？」

あんまり嬉しいことではないけど、私の嫌な予感は大抵当る。
悲しくも、今回も当たってしまったようだ…。

「そんな、いくらなんでも人数が多すぎるよ！！残っているだけっていったって、うちの学校の部活加入率ハンパなく多いんだから、ほぼ全校生徒が鬼になるようなもんじゃない！！」

「でも、全校生徒じゃないだろう？いくらなんでも全校生徒は多すぎて可哀想だからってわざわざ放課後に残ってる生徒だけにしやったんだから、感謝しろよ」

「なっ！？」

薄ら笑を浮かべながら白々しくそう言う龍司は明らかに愉しんでいた。

千隼とユリアも同じような笑みを浮かべて私を見ている。

三人の背中に黒くて立派な翼が見えような気がした。

「拒否権は…?」

無いとは知りながらも思わず問うていた。

今までにも鬼ごっこめいた『遊び』をさせられたことはあったけど、こんなに大勢の鬼を相手にしたことはない。

逃げ腰になるのも無理ないよね…?

「あるよお?」

しかし千隼から返ってきた答えは意外なものだった。

拒否権がある!?

いまだかつてあり得なかったことだ!!

「え…じゃあ、拒否してもいいの…?」

「いいけどお、でも拒否したら代わりにこの鬼ごっこを別の人がやることになるけどねえ」

「別の人…?」

凄まじく嫌な予感がする。

そもそも千隼が人前で見せてるブリっ子キャラで話しかけてきてるところからして、嫌な予感が漂いまくっているのだ。

龍司と同様、千隼がブリっ子キャラを私の前で演じるのは誰か（千隼の本性を知らない人）が側にいる時か、何か思惑がある時だけだ。

「そお。別の人」

「だから、別の人って誰よ？」

ふふっ、と愛らしい笑顔を浮かべると千隼がユリアに目配せをする。するとそれに答えるようにユリアが妖艶な笑みを浮かべて制服のポケットから携帯電話を取り出す。

そして素早くボタンを押すと、耳にあてて「連れてきてちょうだい」と一言話して通話を終えた。

意味が分からなくて戸惑う私を悪魔三人は艶やかな笑顔を浮かべて見つめる。

「ねえ、今の何？」と聞いても誰も答えてくれない。

ただ、愉しそうに微笑んでいるだけだった。

それがひどく不気味だったけど、とりあえず彼等が何かを待っているようだったので、私も待っているしかなかった。

「失礼します」

暫くして、ノックの音とともに背後の扉から誰かが生徒会室に入ってきた。

振り返るとそこには筋肉野郎——もとい、増田さんとゆうちゃんが立っていた。

そう言えば生徒会室に入るまでは一緒にいたのに、気がつけばいなくなっていた。

「ゆうちゃん!？」

「あら、久しぶりね結衣。それに悪魔さんたちも」

ふんわりと柔らかな笑みを浮かべているゆうちゃんは相変わらずのんびりとしていた。

あんな筋肉野郎に拉致られたうえに、こんな訳わかんない状況に巻き込まれているにもかかわらず落ち着いているゆうちゃんはやっぱりただ者じゃない。

———というか今、「悪魔さん達」って言った!？

この三人を目の前にして堂々と「悪魔」なんて言葉を使うなんてあなたは勇者だよ、ゆうちゃん!!

「悪魔……?」

ゆうちゃんの言葉に真っ先に反応したのはユリアだった。
背中からユリアの殺気の籠った怒りが感じられる。
ヤバイよこりゃ…。

「あら、ごめんなさい。口が滑っちゃったわ。でも「悪魔」って言葉あなた達にピッタリだと思うけど」

「どういう意味よ…?」

ゆうちゃんは相変わらず柔らかく微笑んでいるけれど、目が笑っていないのが分かる。

ユリアの殺気めいた怒りは背中が嫌というほど感じ取っている。
ああ、本当にヤバイよこのままじゃ!!

「ユリア、止めとけ。時間の無駄だ」

マジで天使VS悪魔戦争勃発一秒前で、龍司がユリアを窘めた。
そこでようやくユリアの怒りが背中から消えた。
まだ微妙に残ってはいるけどさっきよりはマシだ。
そうしてやっと私は悪魔達の方を見ることができた。

「もしかして別の人って…ゆうちゃん？」

「そうだ」

「うそ…」

それじゃ、結局私は拒否することできないじゃん!!
親友を悪魔達の『遊び』の餌食にするわけにはいかないし…。

拒否権があるみたいな言い方して、結局私が拒否できないような仕組みになっている。

あるはずのない希望に喜んで、そしてどん底に落とされる私はなんて滑稽なんだろう。

そしてこんなことをする彼らはなんて、なんて、悪魔的なんだろう。

「…わかったわよ。やればいいんでしょっ!やれば!!!」

投げやりに言う私を、悪魔達は満足そうに見つめた。
そして形の良い唇を歪めて悪魔達が順々に囁く。

——さあ、『遊び』の始まりだ。

—— 思いっきり俺達を愉しませてね。

—— 逃げちゃだめよ？

私は、完全に悪魔達の掌の上。

悪魔達、遊びを始める

「急がないとっ…！」

転がるようにして生徒会室を飛び出し、私は人^{ひと}気のない廊下を全速力で走りだした。

スカートがひらひらと捲れ上がるけど、常にスカートの下にはスパッツをはいているから気にすることもないだろう。

……スカートが捲れ上がっても気にしないなんて何だか女の子として問題な気がするけどネ。

——今はそれどころじゃないか…。

そう、とにかく今は悪魔たちの『遊び』をさっさと終わらせることを考えなければ。

負けたらとんでもない『お仕置き』と称する罰ゲームを課される。おまけに今回はゆうちゃんという人質もとられているし。絶対に負けるわけにはいかない。

——上から順に探していくかな…。

どこに隠されているかわからないなら可能性のある場所すべてを探さなければならぬ。

だとしたら上の階から下の階へ探していくのが妥当だろう。

下の階から上の階へと探していったら後で鬼たちに追いかける時、逃げ場が少なくなってしまう。

できれば鬼たちに追いかける前に見つけたいんだけど… たぶんそれは無理だろう。

何てたって、悪魔達が私に与えた猶予はたったの15分だけだから。

—— ああっ、もうっ！何で毎回こんなことしなきゃいけないのよっ！

走りながら、もう何十年と思い続けてきた我が身の理不尽さを嘆く私の脳裏には、さっき生徒会室でこの『遊び』について説明する龍司の声が反芻していた。

* *
* *
* *
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

この『鬼ごっこ&宝探し』は名前通り、普通の鬼ごっこに宝探しの要素を加えただけのきわめて単純なものだ。

つまりは鬼から逃げて俺たちが隠した宝箱を見つければお前の勝ち。見つけれなかったらお前の負け。

どうだ、簡単だろ？

低能なお前でも理解できる単純な遊びってわけだ。

スタートはお前がこの生徒会室を出てから15分後。
放送で俺が今学校に残っている生徒達に呼びかけをして、鬼になってもらう。

制限時間はその放送から2時間。

まあ、せいぜいその間に足掻けるだけ足掻くんだな。

ああ、それからこの遊びのルールは唯一つ。

命にかかわるようなことはするな。

唯それだけ。

まあ、死ななきゃ何してもオッケーってわけだ。

お前も鬼たちもな。

くくっ…そう不満そうな顔をするな。

俺は優しいからな、生徒たちを鬼にする放送の時にいつでもお前に宝箱の隠し場所のヒントを一つだけ教えてやろう。

感謝しろよ？

そんで俺達を楽しませろ。

いいな、結衣？

[illegible]

「いいわけねえだろうが、くそつたれーッ！」

頭の中で反芻していた龍司の声にツツコミを入れつつ（生徒会室で言われた時は反撃が恐ろしくてツツコめなかった）、辿り着いた屋上のドアノブを勢いよく開く。

普段通りならば開くはずの無いそのドアはバーンッ！という音とともに難なく開いた。

いつもは鍵がかけられていて生徒は立ち入ることができないのだが、きつとあの悪魔たちが先生達を誑かして開けさせておいたのだろう。普段は入れない教室も全部入れるようにしておいたと、生徒会室から出る直前に言われたし。

——先生達でさえ誑かされたとなると、ほんとにこの『遊び』からは逃げられないんだな……。

そもそも校内で鬼ごっこをするなんてしたら確実に先生達に怒られることだ。

悪魔たちにとつちや、先生に怒られるなんてどうってことないんだろうけど、それでもあの三人はすこぶる外面がよろしいから怒られるようなことは最初からしないはずだ。

それなのにこの鬼ごっこをするってことは、もう先生達は誑かし済みってこと。

何をしたって、怒られる心配もましてやこの『遊び』を止めさせられる心配もないってわけだ。

つまり、いざとなったら先生達に泣きつくという私の逃げ道は完璧に塞がれたということ。

この『遊び』から逃げられないとは分っていたけど……何故だか改めてシヨックだ。

——落ち込んでてもしょうがない。こうなったら探すっきゃないんだからっ！！

パチン、と頬を叩いて自分で自分に喝を入れ直す。
グズグズしてる暇はないのだ。
頑張れ、自分！

——さてと……屋上にはあるかな？

幸い、屋上には物があまりないから隠す場所も少ない。
とりあえずフェンスの内側の安全な場所を隅々まで徹底的に探した後、意を決してフェンスを乗り越え危険ゾーンもくまなく探す。
えげつない悪魔達のことだ、隠す場所もえげつないところに決まってる。

「……ない」

障害物の無い安全な場所もフェンスを越えた危険な場所も、探せる
ところはすべて探した。

タンクみたいな場所にもよじ登ったし、何やらでかい配管が複雑に
絡み合っているとこも隅々まで見て回った。

けど、どこにも宝箱らしきものは見当たらない。

「ここはハズレってことね……」

若干疲れはしたけど、落ち込みはしなかった。

まだ探し始めたばかりだ。

ここで見つかったら逆に驚く。

むしろ怪しいとさえ思う。

あの底意地の悪い悪魔たちが簡単に見つかるような場所に隠すはずがないのだから。

「よし、次行こ」

気合いを入れ直し、屋上のドアを抜ける。

幸か不幸か悪魔たちに振り回されているせいで、私の精神は忍耐強くそれでいて切り替えの早いものにこの何年かで鍛え上げられていた（というよりも鍛えるしかなかったというのが正しい）。

だからひとつダメだったくらいで落ち込みはしない。

それよりも次へと勇む気持ちの方が強い。

——それにしても今残ってる生徒達を鬼にするって……どうやってやるんだろう？

階下へと続く階段を下りている途中に浮かんだ疑問に答えるように、ピンポンパンポーン！という底抜けに明るい放送音が聞こえてきた。

とてつもなく嫌な予感がした。

「生徒会より今現在学校に残っている全生徒にお知らせです。毎年恒例の春のスポーツ大会が来月に開催されます。クラス対抗で行われるスポーツ大会では生徒間での結束が何よりも重要です。そこでこのスポーツ大会に向け生徒間の結束を深めるため、今からゲームをひとつしたいと思います。この放送より2時間の間に、生徒会より選んだ一人のターゲットを今学校に残っている皆さん全員で協力して捕まえてください。行動範囲は学校敷地内。もちろんグラウンド、体育館、テニスコートなども含みます。ルールはターゲットを

捕まえる、ただそれだけです、命にかかわるような危険な行動は
謹んでください」

『遊び』について説明する龍司の声には淀みなんてなくて。
落ち着いた声は耳に心地よくて。

一瞬、放送の内容のおかしさを忘れそうになった。

——しっかりするのよ、私っ！！

どう考えてもこの放送の内容はおかしい。
春のスポーツ大会があるのは本当だ。
だからそこはいいでしょう。
おかしいのはその後だ。

この『遊び』をやるにあたって、悪魔たちが先生や生徒達を唆すために用いた理由が春のスポーツ大会に向け生徒間の結束を深めるため？

何だそれ。

どう考えてもおかしいだろ。

しかも一人vs今残っている全生徒って……明らかに理不尽過ぎるじゃないかつ！

それに命にかかわる危険な行動は謹んで下さいって、ものすごく不穏な感じがする言い方じゃない！？

「ターゲットが捕まった場合、このゲームに参加した方すべての体育の成績にプラス点を与えます。そして直接ターゲットを捕まえた方には僕達生徒会メンバーより、『何でもひとつ願いを聞いちゃいます券』を差し上げます。この券は名前通り一度だけ僕達のできる範囲のことでしたらなんなりとその方のお願いを聞いちゃう券です」

この『遊び』の戦利品が放送された瞬間、学校が揺れた。比喩でも誇張でもなく、マジで揺れた。

野太い男どもの歓声と色めき立つ女達の黄色い声で。

——生徒達を鬼にするってこういうことかっ！どうしよう、思
っていたよりも大事だよこれッ！！

体育の成績にプラス点がつくのはもちろん魅力的だが、生徒達からしたら生徒会のメンバー……つまり、悪魔達が『何でもひとつ願いを叶えちゃいます券』のほうが魅力的なのは明らかだ。
なんてったって悪魔達はこの学校のアイドル的存在。

うちの生徒なら龍司、千隼、ユリアのファンクラブのどれかひとつに入っていると言われるほど。

つまり全生徒にとって『何でもひとつ願いを叶えちゃいます券』は大好きなアイドルのコンサートチケット並に価値のあるものなのだ。皆、目の色を変えて私を追いかけてくるに決まっている。

「ターゲットは2年A組の安藤結衣さんです。皆さんのご健闘を祈ります」

まるで捕食者に狙われる獲物のような心境。
足元から伝わってくる生徒達の興奮した気配に、心臓が早鐘を打ち
体が微かに震えだす。
背中に流れ落ちた汗がやけに冷たい。

『ああ、それからターゲットの安藤結衣さん』

絶望にも似た感覚の中、悪魔の声が聞こえる。
見えるはずの無い彼の姿が見えるような気がした。
意地の悪い笑みを浮かべた美しいその姿が。

「宝箱の在処のヒントは【You must go in to
the country to hear what news a
t London.———ロンドンのニュースを聞きに田舎へ行
く】です。頑張ってくださいね？」

悪魔達の『遊び』は今始まったばかり。

悪魔達、遊びを始める（後書き）

だいぶお久しぶりの更新です。

毎回毎回遅くてすみません（-_-;）

お気に入り登録をしてくださっている方々、本当にありがとうございます。
います。

最後までお付き合いいただけると嬉しいです！

悪魔達、天使を閉じ込める（前書き）

悪魔達、天使を閉じ込める

私は天才型の悪魔達と違って、完全なる努力型の人間である。
勉強だって運動だって努力すればそこその結果を出せるけれど、
何もしないくせに最高の結果を出せる天才型には遠く及ばない。
けど、そう、努力さえすればある程度はクリアできるのだ。

しかし、努力をもつてしてもクリアできないものはある。

人はそれを「苦手なもの」と呼ぶのである。

「何だその英文はあああああああああああああ！！！！」

私には「苦手なもの」が色々あるけれど、その中でもトップスリーに入るほどダメなものが英語である。
どんなに勉強してもまったく理解できない。
そりゃもう周りが引くくらいに。

——くっそおお！！ヒントが英文だなんてえげつないじゃない
のおおお！！

当然ながら悪魔たちは私が英語を苦手としていることは知っている。
知っているからこそヒントを英語で出しやがったのだ。
一筋縄では解けないヒントを出すなど悪質極まりない行為である。

——ムカつくけどこのヒントだけが頼りなんだから文句ばっか

言ってもしょうがない……頑張れ私の脳味噌っ！！

とにかくこの英文のどこがヒントなのか考えなければ。
英文自体に意味があるのか。

それとも和訳された内容に意味があるのか。

この英文がもつヒントの可能性は色々とある。

——うーん、とりあえず英語の辞書でも見つけてくるか……

教室に行けば鞆の中に電子辞書があるけど、私の教室があるのは二階だ。

この学校は全部で五階建て（＋屋上）で、屋上から降りる階段であるここから教室へ向かうのには遠すぎてリスクが高い。

ならば五階にある図書館で紙の辞書を見つけた方がリスクは低いに違いない。

移動距離が短い方が鬼に見つかるリスクも低いのだから。

……まあ、鬼の数が膨大だから見つかるのは時間の問題だろうけど
ネ。

「よし、行くぞ！」

決意したら即行動。

私は勢いよく階段を駆け降りた。

* *
* *
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「ふふっ、いいザマね〜岡田優子!」

ぶつくりとした形の良い唇を持ちあげてユリアは満足気に嗤った。
腰に手を当てて見下した視線の先にいるのは、鉄製の小さな檻に
入れられた一人の少女。

切れ長の黒い瞳が特徴的な岡田優子であった。

「こんなのに入れるなんて悪趣味極まりないわね」

檻に入れられているというのに、穏やかな笑みを浮かべながらユリ
アを見上げる優子には微塵も動揺が感じられない。
むしろ寛いだ様子で檻の中に座っていた。

「ちょっとは動揺したらどうなの？ほんとムカツクわねあんた」

「動揺したら出してくれるの？」

「『お願いしますここから出して下さいユリアさま！！もう二度とあなたの気に障るようなことはいたしません！！むしろ奴隷にでもなります！！』って泣きながら土下座して言ってくれたら出すことを考えてあげてもいいわよ」

「そんなこと虫唾が走るほど大嫌いな相手に言うわけないじゃない。そんなことも分かんないの？あなたバカ？」

「何ですって…！！？」

ふるふると怒りに身を震わせるユリアを優子はおもしろそうに目を細めて眺める。

対するユリアが優子に向ける視線はそれだけで彼女を殺せそうなくらいには鋭い。

両者の間にはブリザードが吹き荒れていた。

「ぎゃははっ！ユリアが口で言い負かされてるなんて超ウケるっ！
」

「うるさいわよ千隼ッ！！まだ負けてなんていないんだからっ！！」

ユリアの横に立っていた天使のような美少年・千隼が爆笑する。
ユリアは笑われたことが許せないらしく、ますます怒りを募らせていた。

優子は切れ長の黒い瞳をすいっと動かして笑い続ける千隼を見つめた。

「ちょっとそこのおチビさん。私、いつまでこの中に居ればいいのか？
」

「……てめえ、今『チビ』って言いやがったのか？」

「ええ、そうよ。あなた以外にどこに『おチビさん』がいるのかしら？
」

千隼の身長は152cmと、男にしてはかなり低い方だ。
その低身長と可愛い顔で天使と呼ばれているのだが、本人は低身長なことを指摘されるのが大っ嫌いであった。

「あはははッ!!お、おチビさんですって!!確かにあんた意外ここにはおチビさんはいないわねっ!!」

「おい、ユリア!てめえそれ以上笑ったらその顔ぶっ飛ばすぞッ!
!女だからって容赦しねえっ!!」

「あんだだってさっき散々あたしのこと笑ったじゃないのよっ!!
ぶっ飛ばせるもんならぶっ飛ばしてみろってのよ!!ああ、でもあたしの顔まで手が届くかしらねおチビさんっ!」

「この高飛車クソ女ッ!!ぶっ飛ばす!!」

「やめろ、お前ら」

ユリアと千隼が掴み合いの喧嘩を始めようとしたまさにその時。

放送をし終えて生徒会室へと戻ってきた龍司が二人を制する。
そしてそのまま二人の間へと入り、優子が入っている檻を見降ろす。

「君はなかなか口が達者なようだね、岡田さん。この二人をおちよくって楽しかったかい？」

「あら、何のことかしら。てか、その喋り方素じゃないんでしょ？
本性と似合わなさ過ぎて気持ち悪いからやめてくれない？」

「へえ、君は僕の本性とやらを知っているのかい？結衣が教えたのかな？」

「それもあるけど、私けっこう顔が広くてね。あなたについての情報も色々知っているのよ。それに私、直感がかなり働くの。あなた達と初めて会った時、あまりにも胡散臭すぎて吐き気がしたくらいよ」

「ひどい言われようだな。このキャラけっこう人気があるんだけどね」

「暴走族の頭が真逆の性格を演じてるなんて胡散臭いと言いきうがないでしょ？」

「そんなことまで知ってるなんて驚きだなあ。学校では品行方正な生徒会長として上手く隠せてると思ってたのに」

「だからそのキャラやめてって言うてるでしょ。気持ち悪い」

「生憎、僕は親しくもない人間に本性を見せるようなタイプじゃないんだ。ごめんね？」

「……気がついてはいたけどあえて言うわ。あなた相当性格悪い」

「君もなかなかのものだと思うけど？結衣から聞いてた君はもっと穏やかな感じがしてたんだけどね」

微笑み会う二人の間にはただならぬ不穏な空気が漂っていた。

触れようものなら即感電死してしまうんじゃないかというくらい、ピリピリと張り詰めたこの空気を前に、ユリアと千隼は巻き込まれたらめんどろだとばかりに早々に部屋の中央に置かれている応接用の柔らかなソファに腰を下ろして、二人のやりとりを傍観していた。

「まあ、僕らの性格の話は今置いてくとして。岡田さん、君にはこの特別な招待席の中で面白いものを見せてあげよう」

「あら、この最高に趣味の悪い席でどんだけつままないものを見せてくれるって言うの？」

「ふふ、これだよ」

そう言いながら龍司は優子が入られている檻から少し離れた正面にある応接用の大きな机に近づき、その上に置いてあったリモコンのスイッチを押す。

すると大きなスクリーンが天井から降りてくる。

そこに映し出されたのは周りを警戒しながら走っていく結衣の姿だった。

「結衣…」

「どう？よく撮れてるだろう？」

「これ、どうやって…」

「隠密、スパイ、情報屋…呼び名は色々だけど、まあそういった類の人間が僕の家にはいてね。彼らは特別な訓練を受けた優秀な人材だから、平凡な女の子一人を尾行して撮影するなんてお手のものなんだ」

「一歩間違えれば犯罪ね」

「何事もバレなければ問題は起きないものだよ」

「……」

振り向いて優しく微笑みながらそんなことを言う龍司に優子は呆れた視線を向けてから、もう一度スクリーンへと目を向ける。
何事にも一生懸命に取り組む結衣の姿は可愛らしいのだけど、今回は事情が違う。
やらされている内容がフェアではない。

「結衣からあなたたちの『遊び』の話はいくつか聞いたことがあるけど、本当にこの檻と同じくらい悪趣味なことしてるのね」

「ひどい言いようだね」

「宝箱の在処が特に悪趣味だわ」

「へえ…そう言うつてことはあの放送で君は宝箱の隠し場所が分かったってことなのかな？」

「ええ。宝箱の在処は——」

優子が宝箱の隠し場所を口にすると、龍司は正面に顔を戻したまま暫く口を開かなかった。

そして不意にすらりと高い体を細かく震わせ、笑い始める。

対して、ソファーに座るユリアと千隼は不機嫌さを隠そうともしないしかめっ面をしていた。

「ふふふ、岡田さん、君はなかなか頭が良いようだね。正解だよ」

くるり、と振り返り再び優子の傍へと戻ってきた龍司はその手でそつと檻を握る。

そしてその茶色い切れ長の瞳で、優子の黒い切れ長の瞳をとらえた。

「だけど岡田さん、これだけは覚えておいて。僕は無駄に頭が良く

てしゃしゃり出てくるような女の子はあんまり好きじゃないんだ」

誰も見惚れるような柔らかな微笑みを浮かべて。

誰もが聴きほれるような優しいげな声音で語りかけて。

「その賢い頭と鋭い直感で、僕たちの邪魔をしようとは思しないでね？」

誰もが慄くような冷たい瞳で、悪魔は天使を檻の向こうから見下した。

悪魔達、天使を閉じ込める（後書き）

更新がたいつつへん遅くなってしまつて申し訳ありません！！！！
しかもあまり物語が進んでいない気がします……少しでも楽しんでもらえると嬉しいです……！

そして感想を下さつた方、本当に感謝しております！！
お待たせして申し訳ありませんでした……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8728f/>

悪魔達の玩具

2011年6月28日12時17分発行